

第 50 話<川田鉦山長>の要約と参考資料

第 50 話<川田鉦山長>の要約

2 人の鉦山師は、1920 年 6 月に亜ヒ焼きを始めると、その枠組みを亜ヒ酸事業家に売って、土呂久を離れ、数か月後に東臼杵郡で試掘をする登録をしています。土呂久では、川田平三郎鉦山長のもと亜ヒ酸事業は順調に伸びる半面、煙害による被害は拡大していきました。

第 50 話<川田鉦山長>の参考資料

50-1 土呂久を去った佐藤年保さんと宮城正一氏

福岡鉦務署管内鉦区一覧（大正 10 年 7 月 1 日現在）

試掘鉦区

試登 1060 9 年 9 月 門川村 金銀銅 236,500 坪 佐藤年保
宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井

試登 1072 9 年 10 月 北川村 金銀銅鉛砒 150,000 坪 宮城正一
大分県南海部郡佐伯町

なお、宮城氏の試掘鉦区は大正 11 年に、鉦業権者が次のように変更されている。

試登 1072 9 年 10 月 北川村 金銀銅鉛砒 150,000 坪 池田京次郎
大分県南海部郡上堅田村

50-2 川田平三郎さんについて

竹内勲さんの話（1972 年 2 月 17 日聴取）

川田は亜ヒ酸の事業をやる企業家だから、昭和 4~6 年ごろ、川田に経営権を譲った。竹内は税金を払いながら鉦業権を持ち続けた。農家の方が地上権（地代）をもっていた。工場をつくるには、借地しなければならず、部落の人の協力がいった。直接被害のあるところは、経営者に買い取らせてやっていた。

川田は佐伯の商人で、野村さんは川田といっしょに来た。支配人みたいな人です。

鉦業権は昭和 8 年に中島へ売った。当時で 3 万円くらいだったでしょう。1 万 2 千坪がうちの関係で、その他は川田さんなどがもっていた。川田自体も、自分の資本じゃなし、神戸の山口商会の協力を得て、品物をそこへ送るといふことで**（不明）を請けてやっていた。

私は昭和 4 年に岩戸に帰ってきた。それまで、小学校を出てすぐ 15, 16 歳のときから、22, 23 歳まで大阪に行き、神戸の貿易屋がふりだして修業を積んできた。そのときは川田さんがやっていて、盛んになったのが 5, 6 年で、昭和 2, 3 年ごろからやっていたの

ではないですか。私の住宅は、岩戸神社の前ですよ。歩いて行くんですもんね。土呂久で1泊して帰るか、日帰りですね。

川田は採掘権を借りていた。竹内が採掘権を川田に貸して、1トンいくらかの計算で払っていた。

神戸の山口商会は、農薬会社で、山口商会の主人が佐伯の出身なので、「お前やってみるか」と、川田に言ったのでは.....。

*竹内勲さんは、昭和4年に岩戸に帰って来たので、それ以前のことは自身の体験ではないから、竹内さんの推測だと考えた方がいい。(川原注)

佐藤実雄さんの話（1976年11月19日聴取）

わたしが鉱山に勤め始めたとき（大正10年か11年頃）、（経営者は）川田になっていた。

堀江武雄さん（川田の甥）の話（1977年8月11日聴取）

川田平三郎は栃木県佐野市出身。父は川田平八。家を飛び出して行方不明、いつしか佐伯に住みついた。そして竹内令さくと組んだ。なかなかのやり手だった。

佐伯に芸者町（遊郭）がある。そこの芸者（佐伯芸者）を奥さんにした。本妻は別にいた。川田は芸者遊びに通って、後妻にして、連れ子を連れて土呂久へ行った。

本妻は東京に来て、（私も一緒に暮らしたことがあるが）いい人で、なぜ、あんな奥さんと別れたのだろう。

後妻の子に「お父さんと呼ぶんだよ」と教育したが、なかなか呼ぼうとしない。後妻は盛んに「お父さんと呼べ」と言っていた。

川田は結核で佐伯で死んだ。後妻は、川田が死ぬ前に、佐伯に家を建てさせた。死んだあと、この家を売って、大阪の池田市に土地を買って、娘に婿を取った。佐伯の屋敷はすごいものでした。それを売り飛ばして、財産を独り占めした。私に背広の上一着を私に形見にくれた。それだけですよ。

川田の兄弟では、私の母が一番上で、女が3人、男が2人。家はいい。佐野市は織物の町で、川田の家は機械の舟みたいなもの（糸をつけるもの）をつくっていた。川田といえ、佐野では有名な家だ。平三郎は二男坊で家出した。東京に出たおふくろの話では、「放蕩者」という話。しかし、仕事を始めるくらいだから、頭はよかった。行方不明だったのに、突然訪ねてきて、「九州でこんなことをやってる」。毎年挨拶に来た。大正末期、何回目かに私が喜んでついていった。20歳くらいのとき。

川田は鉱山師で、口が上手。佐伯に着くまで、どこを歩いていたかわからない。

堀江武雄さんの話（1877年8月12日聴取）

土呂久で川田といっしょの家に住んだ。6畳くらいに川田の一家。4畳くらいに女中と

私。部屋は2部屋しかなく、あとは台所。2部屋の前に、相当広い(6畳くらい)板の間があり、コメや焼酎を置く配給所になっていた。